

『フランス音楽概略史：サン・サーンスから現代まで』

伊藤美由紀

偶然にもフランス訪問中に、今回のテーマでの原稿の依頼を受けた。滞在中に、湖とアルプスの山脈で有名なアヌシーを訪れ、太陽の光により見る度に変容する水の色合い輝き、霧のヴェールに覆われた美しい山々のシルエット、様々な種類の不思議なリズムや音程による鳥のさえずりなどを体験し、その様なフランスの原風景から影響された歴史的に残るフランス人作曲家、画家達の音楽、絵画を思い出さずにはいられなかった。フランスの美しい情景が浮かぶような作品などもとりあげながら、フランスの芸術的なエスプリとは何かと自問しつつ、19世紀後半から現在までのフランス人作曲家とその作品に焦点をあて歴史の流れを追っていききたい。

プロイセンとの普仏戦争で破れたことが原因で、ナショナリズムが刺激され始めた1871年、フランス音楽普及のために国民音楽協会が設立された。中心となったのは、フランク（1822-90）とサン・サーンス（1835-1921）である。ベートーヴェン、ヴァーグナーなどのドイツ音楽から影響を受けたフランクのドイツ的な響きの音楽に対して、サン・サーンスは、フランス音楽の伝統を保守し、古典様式により、秩序と抑制とからなる音楽様式を継承した。管弦楽作品では、対位法を駆使し音色を追究している。代表作品には、ヴァイオリンと管弦楽による《序奏とロンド・カプリチオーソ》、全14曲からなる《動物の謝肉祭》などがあげられる。後者は、他の作曲家の名作を使用したパロディでもあり、彼の機知に富んだ構成的工夫や楽器の巧みな使い方により、絵画的に表現されている。特に13曲目の《白鳥》はチェロ独奏によるオリジナル曲であり、自然の美しい情景が目に浮かぶような描写的な旋律である。

次に重要な作曲家は、サン・サーンスの弟子でもあるフォーレ（1845-1924）である。伝統を厳守したサン・サーンスの作品よりも、新しいことに挑戦しながら、フランス的な優雅さ繊細さをもった作品を残したフォーレの作品は、室内楽、ピアノ独奏曲、歌曲に卓越している。彼の作品は、調性感があるものの、旋法をうまく使用しながら、機能和声はむしろ自由に扱われている。属7、9度の和音はしばしば解決されず、遠隔調にすばやく効果的に転調し、美しい音色を追究している。室内楽作品の代表作として、《ピアノ5重奏曲2番》とピアノ独奏曲の《夜想曲》をあげる。前者は、後期作品の代表作でもあり、アヌシー

滞在中に書き始めた。1 楽章はヴィオラの叙情的な旋律から始まり、全 4 楽章において構成的に熟考されている。後者は全 13 曲あり、第 1 番から 13 番までに約 40 年の作曲年代の隔たりがある。彼の特徴でもある旋律的な流麗な表現に加え、第 7 番以降の後期の作品には、知的な構成感、複雑で大胆な響きとともに、内面的な厳格さも感じられる。また、フォーレは、和声において、次の時代を築いたドビュッシー、ラヴェルの先駆者と言えるであろう。

次に、印象派を代表する作曲家、ドビュッシー (1862-1918) とラヴェル (1875-1937) を紹介する。当時のパリでは、文芸では象徴主義が、美術では印象主義が隆盛期を迎えていた。これらの風潮に共感し、音楽の分野で新たな境地を開いたのがドビュッシーである。伝統的な音階のみならず、旋法、全音音階、5 音音階、半音階などの使用、機能と声にとらわれず、並進行、空 5 度 (3 度の音が無し)、4 度堆積和音、非和声音などを駆使し、微妙な音色、響きを追究している。同時に、規則的な形式やリズム、伝統的な旋律を避け、流動的な色彩の変容を試みている。それ故に、彼の作品タイトルが示唆するように、海、水、波、光、風、雲など、常に流動しつつあるものに関心をもっていただろうと思われる。彼自身、音楽家になっていなかったら、画家になっていただろうと言っている。管弦楽作品においては、自分の描きたい音色を効果的に生み出す楽器のみを選んで使用している。音の画家とも言えるドビュッシーは、管弦楽作品の代表作である《牧神の午後への前奏曲》、交響詩《海》の中で、絶え間なく揺れ動く微妙な光、色、空間の交錯を描いている。彼自身、ピアニストとしての音楽活動を行っていたという経歴もあり、ピアノ独奏曲においても歴史に残る多彩な試みを行っている。代表作として、交響詩《海》の後に書いた全 6 曲から成る《映像》、全 2 巻 24 曲から成る《前奏曲》をあげる。前者の第 1 曲目である《水の反映》は、繊細なパッセージにより光と影を描いている。ラヴェルの《水の戯れ》に影響を受けた作品だと言われている。後者は、各々の小品に叙情的な題名がつけられており、作曲語法の多様な挑戦を試みた彼のピアノ作品の頂点を極めた作品とも言えよう。ドビュッシーは、『音楽は、厳格な形式の内部に流れる何かではなく、色とリズムをもった時間である。』と言及する。

一方、フォーレの弟子でもあるラヴェルの音楽語法は、ドビュッシーに比べると客観的で、形式においても比較的、伝統的な手法である。調性と旋法、機能と声と半音階、非和声音、並行和声などを織り交ぜて効果的な音色を生み出している。ラヴェルも数々のピアノ作品を残す。その中で最も印象派的な作品

は、フォーレに捧げられ、後のドビュッシーの作品にも影響を与えた《水の戯れ》であろう。古典的なソナタ形式を用いて美しい水の動きを表現している。彼は、全ての楽器の音色、特性を理解し、効果的かつ巧妙に駆使することのできる管弦楽法の天才でもあった。それ故に、自作、他人のピアノ作品から管弦楽に編曲された名作も数々残す。管弦楽法の変奏曲とも言えるバレエ音楽《ボレロ》が、彼の才能を実証している。付言するなら、ラヴェルは、スペインに近い町で生まれ、母親がスペイン人であるなどの影響から、スペイン音楽にも関心をもち、スペインの要素を含んだ作品も多数ある。《ボレロ》も、スペインの民族舞踏である。

その頃、印象主義に反対し、サティから刺激をうけて集まった若い作曲家グループ、6人組（オーリック、デュレ、オネゲル、ミヨー、プーランク、タイユフェール）が現れる。サティ（1866-1925）は、印象主義の作曲家とは異なる独自の道を進んだユニークな存在であった。作品タイトルも、ユーモラスで風刺的なものが多い。古代ギリシャやグレゴリオ聖歌に関心をもち、旋法の使用は、ドビュッシー、ラヴェルにも影響を与えた。簡素なテクスチャーで、気まぐれで機転に富んだ旋律を特徴とする音楽である。ピアノ曲で有名な《ジムノペディ》は、ドビュッシーにより管弦楽曲に編曲されている。パリ万国博覧会でガムラン音楽、ルーマニアの音楽から影響を受けて完成し、東洋的な響きをもつピアノ曲《グノシエンヌ》は、拍子記号、小節線をもたず、後の図形楽譜の先駆けとも言えよう。又、コクトー、ピカソ、6人組と交流があり、多大な影響をもたらした。

次に続く世代で絶大な影響力を誇った作曲家は、メシアン(1908-92)である。彼は、敬虔なカトリック教徒で、教会のオルガニストでもあり、その信仰と関連した作品を多数残している。また、自然を愛し、特に鳥の歌に関心をもち、鳥の声を採譜、研究し、作品の中では、特徴あるリズムと音色をもった音形で表現している。独特のリズムの扱いは、古代ギリシャ語の詩、韻文のリズム、インド音楽などの研究から導き出され、著書『わが音楽語法』に解説されている。代表作には、第二次世界大戦の時に収容所で作曲した《世の終わりのための四重奏曲》、2台のピアノの為に全7曲からなる《アーメンの幻影》、全7巻13曲から成るピアノ独奏曲《鳥のカタログ》などがあり、妻でピアニストのイヴォンヌ・ロリオの為に書かれ、彼女に初演されたピアノ作品が多数ある。同時代に発明された電子楽器の一種であるオンド・マルトノを使用した彼の最初

の大規模な編成の管弦楽曲である《トゥーランガリラ交響曲》も、傑作のひとつと言えよう。教育者としても著名であり、弟子の中には、ブーレーズ、シュトックハウゼン、クセナキス、ミュライユ、グリゼイほか、次の世代を担う個性的で非凡な才能をもった作曲家達がそろろう。

最後に、その弟子の中から、現在も国際的に活躍中のブーレーズ（1925-）、ミュライユ（1947-）について述べる。ブーレーズは、ヴェーベルンの極小様式に影響を受け、音高のみならず、音価、強弱、音色の要素を組織化したトータル・セリエリズムの技法を徹底した。初期作品には、セリエル音楽の代表作《ピアノソナタ2番》、セリーを自由に開放し柔軟な使用をして成功した室内楽曲《主なき槌》があげられよう。近年には《デリーヴ》や《シュル・アンシーズ》などがある。作品改訂を何度も重ねることが多い。IRCAM（フランス国立音響音楽研究所 1977-）の創業者であり初代所長でもある。指揮者としても精力的に活躍している。

ミュライユは、70年代、ブーレーズに追従するセリエル音楽の動向に反し、アンサンブル・イティネレールを演奏家達と始め、楽器の新たなテクニックの探求、生演奏でのエレクトロニクスの実現を試みた。アナログからデジタルへの移行期に、オンド・マルトノ、シンセサイザーなどの電子音響に着眼し、音響的な可能性に挑んだ。又、IRCAMでテクノロジー、ソフトウェアの開発に関わり、画期的な作品制作を行う。スペクトラル・ミュージックの代表作作曲家でもある。精緻なコンピューター分析を利用して作曲されているにも関わらず、彼の感性と聴覚により、作品は詩的で音楽的な自然な流れで満たされている。アンサンブルとエレクトロニクスの為の作品《デシグラシオン》、《砂丘の精霊》、《冬の断章》など、複雑で微妙な音色、音響で表現された作品である。

（音楽現代 2012 短期連載『ミュライユの音楽的思考』拙著を参照）

限られた紙面で多くを語ることは難しいが、作品を聴きながら、フランス文化の中で育まれた作曲家達の音楽の結晶を堪能していただきたいと思う。